

## DPC公表データから見た北近畿地域における医療提供体制の現状と問題点について

○家原葵<sup>1)</sup>、貝増英貴<sup>1)</sup>、三宅美紀<sup>1)</sup>、福富亮平<sup>1)</sup>、森本大志<sup>1)</sup>、星雅丈<sup>1)</sup>

1) 成美大学 経営情報学部 医療福祉マネジメント学科

### 【目的】

成美大学の所在する北近畿は市町村が点在し、医療機関間の距離が比較的遠く、地域で医療がある程度完結する必要があるが、1病院で担いきれぬ場合、機能分化が進んでいる可能性もある。そこで、一般に入手可能なDPC公表データを用い、北近畿地域の医療の現状を探った。

### 【方法】

北近畿のDPC参加7病院を調べる為、DPC公表データ平成21～23年度分のMDC別・施設別に集計されたファイルから当該病院のデータを抽出し、分析を行った。

### 【結果】

図1はMDC別手術件数・平均在院日数(H23)の分析例である。横軸は病床数で規格化した手術件数で、MDC04～06のみを図示した。MDC05において、 $R^2=0.7824$ と強い相関を示した。特にA病院は「狭心症、慢性虚血性疾患」の件数が多かった。手術件数を重ねて技術が向上し、診療の効率化、在院日数短縮に繋がっている可能性がある。

### 【考察】

一般市民が病院機能の正確な情報を得るのは難しい。A病院Webサイトでは「循環器系疾患に強い」ことがわからなかった。DPC参加病院は公表データの簡単な分析でも自院の強みを把握することが可能である。地域医療機関の機能分化のために、病院は積極的に地域に情報発信する必要がある。

### 【結語】

DPC公表データの分析で自院の強みを認識可能であり、病院の機能分化推進のため、地域にその情報発信が望まれる。

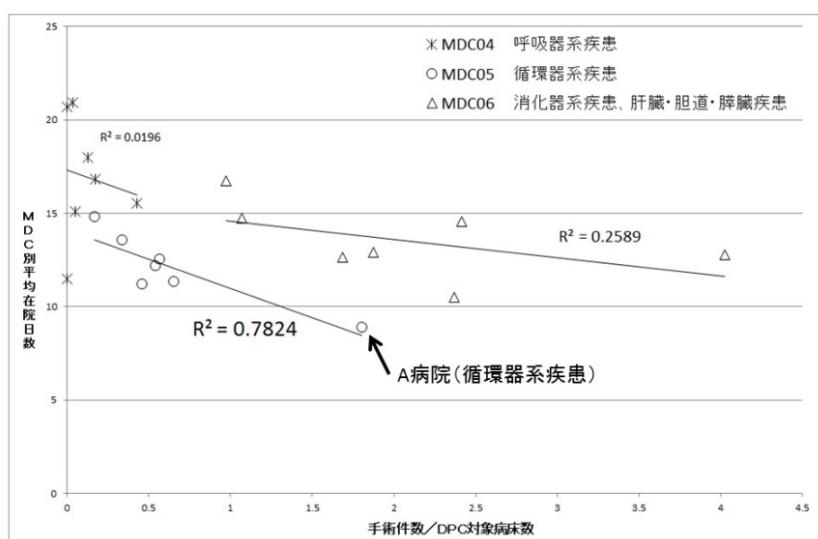


図1. 手術件数と平均在院日数の相関(医療機関別、MDC04・05・06について)